

補論3 震災を記憶することと地域活動としての「<みくら5>への歩み」

浦野正樹

阪神・淡路大震災を発端にした御蔵地区の地域活動を語る場合、相互に入り組んではいるものの、大きく3つの時期・テーマに分けて考えることが出来るように思う。ひとつは、災害発生から瓦礫撤去を経て復旧への大きな筋道を模索していた時期であり、まちづくり協議会が設置され最初の住民案に向けての検討が開始される時までである。この時期は、住民の緊急対応から、避難生活、仮設生活、そして復旧への大きな枠組みづくりがテーマとなった時期である。二番目は、具体的なまちづくり協議会の活動が進み、最初の住民案の策定以降、神戸市や施工者、地域住民との交渉のなかで、制度的な制約が明確にあらわれ計画案が縮小しつつ具体的なゾーニングが決定されていく過程である。道路・公園といった土地利用計画が決まっていくと同時に、地域再建の方向性がよきにつけてもあしきにつけても決定されていく段階である。最初の住民案は、厳しい現実の波のなかで計画の規模も参加者の範囲も縮小し「みくら5」の共同住宅案へと変わっていく。第三の時期は、おおよその参加者が定まった共同住宅案が事業化していく過程で、当時の経済状況や地域外的な要因に影響されながら、建築規模の見直しや基本設計の変更を余儀なくさせられていく。また、共同住宅のなかに地域活動スペース「ぶらざ5」がつくられ利用方法が固まっていく過程である。

私自身は、1995年の阪神・淡路大震災発生以降、仲間数名の研究者たちと協同して、災害時のボランティア活動の実態調査と並行させながら、地域住民の生活再建やコミュニティ再建の過程についての集中的な調査活動に入っており、復旧・復興を取り巻く諸制度が、地域住民や地域集団の働きかけを受けてどのように呼応しうのか、また制度の壁が地域社会にどのような波紋を投げかけるのかについて、被災地の現状を経験的に研究しようとしていた。御蔵地区との関わりは、そうした調査研究活動の文脈のなかで「まち・コミュニケーション」のスタッフと出会い、それ以降、ボランティア・セクターと調査研究セクターという立場の違いはあれ、いろいろな側面での連携関係を深めてきたことによる。上の時期区分でいうと、本格的な出会いは第一期の後半からということになる。

震災発生後、われわれの研究グループは、西宮市から芦屋市、神戸市東部、神戸市西部、淡路島にかけて何回となく被災地の歩みをたどり、被災地の問題状況がどのように推移していくかをサーベイしていた。われわれの調査方法は、当初から、それぞれの地域が直面している課題やそれに対する対応、とくに集団的な取組みの可能性について、集中的な聞き取りを進めていくと同時に、震災後に次々と

予想される事態を先取りつつ、近い将来顕在化してくるであろう事態や課題を投げかけながら、それを乗り越える心構えと必要な備えや知識を伝え、ともに考えていくというスタンスをとっていた。被災地の悩みが深ければ深いほど、雲仙普賢岳噴火災害での調査などから得られた知見を駆使しながら、その地域の文脈で、何にどう取り組んでいけるかの共同謀議に結果的に参加することになる。

従来の社会調査が、調査当時までに進行している事態を出るだけ正確に客観的に浮き彫りにすることに主眼が置かれ、対象者への介入をできるだけ回避していたとすれば、ここでの調査はいわば将来起こる事態を喚起しつつ、それに立ち向かうために現在の地域社会の諸資源をどのように再編成し活用しうのか、それを地域の文脈のなかでぎりぎりまで突き詰めてシミュレーションしていくことにより地域の現状（や脆弱性）を把握しようとしたといえるように思う。

こうした行脚を続け、いくつかの調査地とつき合っていく中で、徐々に被災地のコミュニティ調査の焦点を、「地域にのしかかってきた問題をどのように解決するか、地域住民の潜在的なニーズをどう集約し、その主要なエネルギーをどこに向けながら、地域活動を展開させていくか？」にあわせていった。地域によってはそれが非常に鮮明に現れ焦点が定まるところもあれば、住民ニーズが対立拡散し潜在化したままに時に制度の壁の前で暴発する状態を繰り返すところもあった。

こうした中で、複数のルートを介して御蔵地区と知り合うことになる。まちづくりを考えるある会合で知り合った白崎氏（まちづくり協議会現会長）が、当初、地域の難しさのなかで住民の期待に応えうる方策をもとめて真剣に悩み訴えかけてくる姿、そしてその後、小島案（後述）へと集約する過程で不安の中に光明を見出した喜びを伝える姿は、今でも忘れられない…。また、「まち・コミ」の小野君、浅野さんとは、ボランティア団体のヒアリング調査を主として進めていた研究メンバーの首磨志保さんから何度となく話を聞いたうえでの出会いであり、小島案へ至る問題整理をしていくことになる。そして、コミュニティ調査を進めていくなかの田中社長（兵庫商会）との出会いは僕にとって実に鮮烈であり、「人を感動させ動かす力」を感じ取ったものだった。

最初の住民案である御蔵6丁目北共同住宅案（通称小島案）が、『ひこばえ』の共同再建案として掲載されるまでは、地域のさまざまな立場の住民の生活課題をいかにして解決しうるかを包括的に（最大公約数的に）考えていくプロセスであり、地域住民が復興に向けて夢と希望を掲げて

いける道筋を描こうとしたものだった。そこでは、制度的な制約を一旦捨象し、より多くの住民層のニーズに応えられる広がりをもった計画案の作成に焦点が置かれていた。多くの住民が今後の生活再建の方向性を考えあぐね、強い喪失感を感じていた時期であり、それだけに住民主導の案は前に進む気力を喚起させることができ、共に歩むに足る魅力を持つものである必要があったのである。

その通称小島案は、御蔵6丁目北ブロック一帯を一区画として権利集約をし、そこに低中層棟と高層住宅棟を配置させながら、低中層は露地のある一戸建住宅の連なりを演出し空中地盤をうまく利用してその上に2階建ての戸建住宅を組上げるユニークな建築にしようとしたものであった。また、神戸市を事業主とした高齢者向けの公営住宅や、店舗・事務所スペースをその区画のなかに組み入れることを可能にし、さらにブロック内に実質的な空地部分を設けて、それを区画整理上の公園スペースとして読み替える戦略を埋め込んだ設計を考えていた。いわば、ブロック全体の権利者・居住者がすべての権利を一体化し、それにインナー型市街地住宅総合設計制度を適用することにより、復興に伴う都市計画上の課題を解決しようとする野心に満ちたものであった。

ただし、こうした案を集約し、その案への住民の関心をつくりあげていくプロセスとして、一方で、地域の被災体験をしっかりと刻みとめ、そうした被害を起さない安全にも配慮した都市空間を造る必要性を確認していくと同時に、復興に向けて具体的な生活イメージを考え共有することが必須であった。そうした中で、地域住民や権利者一人一人の現状と意識、将来展望についての聞き取り調査を実施しようということになる。御蔵が置かれた状況を前提にしつつ、それを突破できる方策、住民の合意の範囲を探る調査でもある以上、通り一遍の聞き取りでは本音に迫れない。しかも、ボランティアや一般住民が聞き取り調査を行なうため、ある程度標準化した調査票が必要になる。したがって、被災の実態やその後の対応を含めた徹底的な事実関係を押さえると同時に、将来の生活イメージ(とまちでの住まい方のイメージ)をできるだけ想像したうえで、個々人の生活の志向性が現われ出るような調査票の設計を工夫した。日中、まち・コミのメンバーと状況分析をして議論を積み重ね、夜、大学院の木村さんと調査票作成に打ち込む日々が続いたことを思い出す。その結果、無味乾燥な固い集合住宅イメージを払拭するため、個別注文住宅に近い共同住宅の立体設計図や写真などをふんだんに盛り込んだ調査票になった。延藤さん(現千葉大)を招いての幻燈会ワークショップなどは、そうした時期の住民への働きかけの試みのひとつである。

そうして出来た調査票を手にボランティアや住民、われわれが数人ずつのグループになり、かつての地域住民や地

権者を捜し求めて芦屋から加古川まで各地を訪れていった。災害の凄まじさ、迫ってくる火をみての思い、避難所での人間関係や避難生活時の親族関係、これからの生活の手がかり、土地・建物の権利を共有化するうえでの生活や社会関係の不安など、ひとつひとつが生々しい人間像の発見であり、あらためて今後の展望を語ることの難しさを思い知らされるものであった。

こうした調査を拡げていくことを通じて、まちとしての共同事業にのっていきそうな人や条件の吟味が共同で進められた。住民案を進めていくうえで必須な「制度の柔軟な運用・解釈の可能性」をめぐる行政との交渉が進まず、制度上の可能性と住民案の前提条件の多くが不確定なまま、住民は結論が出せず多くが総論賛成各論不明状態で、他方、行政は既定の区画整理手続ののっとり、秘密裡に用地買収と換地交渉を進めて一歩も枠をはみださず、時間はどんどん経過していく。行政との交渉も進まず、住民の大多数は制度の壁を感じながらも動けず(動かず)、権利関係や生活状況の難しさのなかで個別な決断を迫られていく……。

ここから先は<みくらファイブの記録集>の本文に詳しいが、苦渋に満ちクリティカルな判断を何度も繰り返したうえで、戦略変更を行なっていくプロセスであった。震災後の時間の経過が被災地や復興事業を取り巻く環境を変え、神戸各地のハード面での復興が進んでいく中で住宅供給が増え、日本経済全体の不調がそれに重なって神戸の共同化住宅事業を難しくさせていく。こうしたなかで、共同化住宅「みくら5」が実現したことは、まちづくり活動の大きな成果であり、しかも活動の拠点である「プラザ5」を創った尽力は今後のまちにとって限りなく大きな貢献であると確信している。今後、それを生かすとともに、復旧に至る日常化する生活のなかで「まち」の課題を発掘し見続けることが、その苦渋の時代に取りこぼしていった問題にどう応えるかを考えることにつながるであろう。また、それは他の地域において、神戸の体験を伝え共にまちを再発見する動きを刺激することにもつながるように思う。